九州大学大学院 比較社会文化学府
『比較社会文化研究』第24号（2008年9月）

比較社会文化研究　第二十四号　抜き刷り
二〇〇八年九月三十日　発行
九州大学大学院比較社会文化学府

隠喩とは何か

ストラック・ダニエル

九州大学大学院 比較社会文化学府
『比較社会文化研究』第24号（2008年9月）

『比較社会文化』第二十四号（2008）（一）～（十四）
Social and Cultural Studies
No. 24 (2008), pp. (1)～(14)

隠喩とは何か

ストラック・ダニエル

文学作品における隠喩に関して

近代文学においては、隠喩が含まれていると考えられる作品が多数ある。しかし、特定の作家、あるいは特定の作品における隠喩の役割が説明できても、時代を越えて複数の作家や作品に関して分析を行なう際、より綿密で理論的な土台が必要であると考えられる。文学作品の隠喩性を調査する前に、隠喩に関して理論的に検討しなければならない。

隠喩論には、様々な説が提出されてきたため、現在に至っても、隠喩に関する考察が一致点を見ないのは事実である。本論は、主流をなすと考えられる隠喩論を徹底的に分析し、文学と隠喩の関係に関して検討していきたい。

一般的に、比喩と隠喩とは対立する用語であるとされている。比喩と隠喩との対立性を説明するために、「対岸の火事」という諺を利用したい。例えば、自分と関わらない人間が困難に出会った際に、この状況を比喩（または直喩）を用いて表現すれば、「自分にとって、あの人の問題は対岸の火事のようなものだ」という発言になる。一方、同じ諺を隠喩（または暗喩）で表現する場合、「あれは対岸の火事だ」と、発言することになる。つまり、「のようだ」、「のごとく」などという表現を用いるか否かによって、比喩であるか隠喩であるかの区別ができると、一般的には説明される。しかし、今後紹介する様々な学術的見解においては、この隠喩の定義のような一般論が通用しないこともある。右記の対立関係を認めない研究者もいる上に、隠喩に関する文章が翻訳される際に、隠喩のことを比喩と表現し、比喩のことを暗喩と表現するなど、様々な異なる表現が見られるために、用語のコンテクストを理解した上で、どの意味を指しているかを判断した方が良いと考えられる。

隠喩論の原点：古代ギリシア哲学者のアリストテレス

英語、フランス語などにおいて、隠喩のことはメタファーという。メタファー研究の原点は古代ギリシアにあり、メタファーという言葉は古代ギリシア語に由来している。隠喩を取り上げた、アリストテレスの学術書は『詩学』および『弁術論』である。アリストテレスの「詩学」において、メタファーという語の品詞は、名詞ではなく、動詞として分類されている。

> "τὸ γὰρ εὖ μεταφέρειν τὸ τὸ ὁμοίον θεωρεῖν ἐστιν." (Aristotle 九〇、アクセント記号、気息記号省略)
> 「なぜなら、すぐれた比喩をつくることは、類似を見てとることであるから。」（「詩学」八〇）

右記の箇所において、μεταφέρειν (metapherein) と表現しているが、その例を考えてみよう。語源から考えて、この場合、μετά- の意味は "with them, among them" [合わせて、交合に] (Liddell & Scott, 一一〇九) と考えられる。後半の φέρειν は φέρω という動詞の不定詞形で "bear, carry" [持ち運ぶ] (Chase & Phillips 二一〇) という意味である。従って、「隠喩」の語源は、二種類のものを、何らかの形で合わせて扱うことにあるといえる。実例を挙げると、アリストテレスが「詩学」を書いた約百年前のエウリピデス著の『フェニキアの女たち』[*Phoenissae*] の次の箇所がある。

> "κέντρα [...] πώλοις μεταφέρων" (Euripides 三五八)
> "apply the goad to the horses in turn" (Liddell & Scott 一一〇八)

これは、馬車を運転している際に、鞭で左右の馬を交互に打つことを指している。

アリストテレスの時代において、μεταφέρω という造語の意味が主に「移転」という意味で使用されているが、その定義は、"transfer a word to a new sense, use it in a changed sense"［語を新たな意味に移す、語を本来と異なる意味で利用する］及び "employ metaphor"［隠喩を利用する］(Liddell & Scott 一一一八) である。しかし、語源を中心に考えれば、元々、メタファーは言語と関連する用法ではなく、鞭などを「交互に持ち運ぶ」という身体的動作に基いているため、隠喩の発想自体が隠喩的であったことが分かる。

アリストテレスは「詩学」において、隠喩の定義を次の通り行なっている。

> (3) 比喩（転用語）とは、（あることを言いあらわさない）本来別のことをあらわす語を転用することをいう。すなわち、(a)類をあらわす語を、その類に属する種に転用すること、(b) 種をあらわす語を、類に転用すること、(c) 種をあらわす語を、別の種に転用すること、(d) 比例関係によって転用すること、のいずれかである。
>
> (a) わたしのいう類から種への転用の例は、「ここにわたしの船が停まっている」（「オデュッセイア」一・一八五、二四・三〇八）に見られる。つまり、停泊していることは、（類としての）「停まっていること」の一種である。（「詩学」七九）

最初に注目すべき点は、アリストテレスの隠喩に関する見解が、古典的論理学及び動植物分類法と同様な理論に基いている点である。例えば、動植物分類法に基いて犬を説明すれば、「動物」に所属の上、より詳しい所属をあげると、「脊髄動物」、「哺乳類」、「霊長類」、「肉食動物」、「イヌ科」、そして、最後に「犬」であるが、アリストテレスは、「止まる」と「停泊する」、この二つの語の二項対立関係が「イヌ科」と「犬」の二項対立関係に類似していると考えていた。つまり、「停泊する」という表現は船に関してのみ言えるような個別的な言葉であるが、「停まる」という語はそれと類似するが、船の場合のみならず日常的に利用される表現である。このような理屈が妥当であるか否かは別にして、隠喩にみられる関連性が基本的に論理学に基いているという考えは、実にギリシア哲学的な発想であるといえる。

先の和訳において、アリストテレスの隠喩に関する見解のおよその意味が伝えられているとはいえ、古代ギリシア語の原文と和訳の間に差異が生じているともいえる。英訳と和訳を比較すれば、和訳の場合において原文の例の意味から僅かに離れているために説得力を失っていることが分かる。

> "ὑμῖς δε μοι πὸ ἑστηκεν" (Aristotle 八〇、アクセント記号、気息記号省略)
> "Here stands my ship." (Aristotle 八一)
>
> 原文 "ἑστηκεν" ↔ "ὁρμειν"
> 英訳 "stand" ↔ "ride at anchor"
> 和訳 「停まる」 ↔ 「停泊する」
> 字義通りの意味 「立つ」 ↔ 「舫う」

原文において、ギリシア語では船の状態は "ἑστηκεν" (Aristotle 八〇)（英語でいうと、"stand"）という語で表現される。つまり、ホメロスが、船は「立っている」という表現を用いたからこそ、アリストテレスは、隠喩性に満ちた例としてそれをあげている。英語の翻訳者ファイフの訳をみると、この点が明らかになる。ファイフは "Here stands my ship." (Aristotle 八一) と訳している。普段、船は人間のように「立つ」ことが不可能であるため、ホメロスが利用した表現は明白な隠喩である。しかし、日本語の翻訳者が、「船が立つ」という日本語の表現を、そのまま利用したとすれば、映画においてタイタニック号が沈没するシーンと同じような船が垂直に立つイメージを呼び起こすことになると予測しただろう。このため、「停まる」と「停泊する」という二項対立関係、つまり比較的控えめで誤解しにくい表現に置き換えた。言語文化体系に応じて言語の詳細及び隠喩が異なるため、翻訳において、隠喩の本来の意味をそのまま伝えることが不可能な場合もあるといえる。先と同様な、翻訳がゆえに生じる問題は従来の隠喩研究において、研究が発展しなかった重大な理由の一つであったと、筆者は考える。隠喩を説明する際、理想的には、一つの言語体系に限定した方が良いだろう。

以前に説明した、動植物分類法に従う隠喩の例の他に、アリストテレスは「比較関係」による隠喩の存在も指摘している。彼はとりわけ詩における隠喩に関して、次の通り論じている。

> (d) 比例関係とわたしがいうのは、第一のものにたいする第二のものの関係が、第三のものにたいする第四のものの関係と同じである場合のことである。じじつ、このような場合、人は第二のものの代わりに第四のものをいうであろうし、また第四のものの代わりに第二のものをいうであろう。（「詩学」八〇）

「詩学」において、アリストテレスは詩における隠喩の典型的な例を提供しているので、その説明を読んでみよう。

また、ときには、比喩によっておきかえられたものと語が関係をもつものを、その比喩につけ加える場合がある。わたしがいうのは、たとえば、酒杯がディオニューソスにたいしてもつ関係は、盾がアーレスにたいしてもつ関係と同じである、ということである。したがって、人は酒杯のことを「ディオニューソスの盾」というであろうし、盾のことを「アーレスの酒杯」というであろう。（「詩学」八〇）

この隠喩を理解するには、ギリシア神話の知識が必要であるが、「ディオニューソス」とは、お酒の神であり、「アーレス」は戦争の神であった。現代的に言い換えれば、マイクロホンは宇多田ヒカルの剣であるといえば、同様な関係性を表現することになる。アリストテレスはさらに説明を次の通り加える。

別の例をあげるなら、老年が人生にたいしてもつ関係は、夕べが一日にたいしてもつ関係と同じであり、人は夕べのことを「一日の老年」、あるいはエムペドクレースが用いた表現のようにいいあらわすであろうし、老年のことを「人生の夕べ」、「人生の日没」というであろう。

また比例関係におかれたもののうち、それをあらわす語をもたないものがある。しかし、そういう場合にも、同様に比喩を用いて語ることができるであろう。たとえば、種子を投げることは「蒔く」といわれるが、太陽からの炎を投げることを言いあらわす語はない。とはいえ、太陽からの炎を投げることが太陽にたいしてもつ関係は、蒔くことが種子にたいしてもつ関係と同じであり、ここから、「神のつくった炎を蒔きながら」といわれる。（「詩学」八〇一八一）

右記の箇所を熟読すると、アリストテレスの見解においては、隠喩は二項対立関係に基いているが、その二つの項目は必ずしもすべての点において類似しているとは限らないことが分かる。従って、アリストテレスによると、良い隠喩はより多くの類似点を含むが、類似点が少ない二項対立関係には、隠喩として何らかの欠点があると判断できる。このような、「正当」な隠喩と「不当」な隠喩は、二分できるとアリストテレスは主張している。

そして、不適切な隠喩を用いると、真面目であるはずの「演説」が一気に「文学」と同様な「低い」レベルに陥る可能性があるので、アリストテレスは次の通り演説者に注意を促す。

さらに四番目として、表現が生彩を欠く原因は比喩の中に見られる。すなわち、比喩もまた、その或るものは滑稽味があるという理由から（その証拠に、喜劇作家も比喩を用いているのである）、また或るものは、あまりにも荘重で悲劇じみたものであるという理由で、適切さを欠くことがあるからである。また比喩は、あまりかけ離れたところから持ってくるなら、その意味が曖昧になってしまう。（中略）アルキダマスが哲学を「法を制す岩」、『オデュッセイア』を「人生の立派な鏡」と呼んだり、「かかる玩具を詩の中に持ち込むことなく」と言っているのもその類いである。（「弁論術」三二〇一三二一）

つまり、アリストテレスによると、隠喩は可能な限り避けることができる場合は、避けるべき技巧ということになる。詩人が利用するような手品であるからこそ、真面目な演説において利用する際には、注意が必要である。しかし、彼は隠喩を完全に否定しているわけではない。彼は次の引用において、隠喩の上手な利用は「能力をしめすしるし」であると述べている。

とりわけもっとも重要なのは、比喩をつくる才能をもつことである。これだけは、他人から学ぶことができないものであり、生来の能力を示すしるしにほかならない。なぜなら、すぐれた比喩をつくることは、類似を見てとることであるから。（「詩学」八七）

果たして、隠喩は特別な「才能」とつながっているだろうか。次に検討していく、リチャーズの見解において、隠喩と才能の関係が重要な問題として取り上げられることになる。

隠喩理論の近代的原点：文芸評論家　リチャーズ

アリストテレスの影響力があまりにも強大であったため、一九世紀まで、隠喩は主に弁術論において研究され、「言葉のあや」の一種として捉えられてきた。複数のロマン派詩人の独創的な発想を除いて、この長期にわたる隠喩論の不毛に終止符を打ったのは、イギリス・ケンブリッジ大学の文芸評論家、I.A.リチャーズであった。一九三六年の講演において、彼は隠喩に関するとりわけ新たな学説を発表した。その講演内容が本に収められ、『新修辞学原論』として発表された。

リチャーズがアリストテレスの見解を参考にしたのは当然だろう。少なくとも、Loeb

Classical Library"が出版したファイフの対訳版を彼は読んでいたと断言できる。なぜなら、リチャーズがアリストテレスを批判する際に、ファイフの英訳が引用されているからである。とりあえず、アリストテレスに関する引用文を読んでみよう。

「隠喩を駆使することは、何にもまさる重要なことである」と述べたのは、誰あろう、アリストテレス（『詩学』）その人です。ところが、かれは語をついで「これればかりは他人に伝授することができない。それは天才のしるしである。というのは、よい隠喩を作るには、類似を見抜く眼識がなければならないからである」という。（リチャーズ 八二）

だけど、われわれはみな、類似を見抜く眼識をもっていればこそ、生きてもいられるし、話もできるのではないでしょうか。（リチャーズ 八二）

リチャーズの原文の英語は次の通りである。

...but by far the greatest thing is the use of metaphor. That alone cannot be learnt; For the right use of metaphor means an eye for resemblances. But we all live, and speak, only through our eye for resemblances. (Richards xx)

リチャーズのアリストテレスからの引用がファイフの英訳に即していることは次の引用文によって分かる。

...but by far the greatest thing is the use of metaphor. That alone cannot be learnt; it is the token of genius. For the right use of metaphor means an eye for resemblances. (Aristotle 九一)

英訳に頼ることが理想ではないとしても、リチャーズは英訳を通してアリストテレスの見解を理解したということが、おそらく彼の研究の重大な進展に繋がったといえる。

アリストテレスによると、隠喩は「他人に伝授することができない」との見解に対して、リチャーズは、「類似を見抜く眼識力をもっていればこそ、生きてもいられるし、話もできるのではないでしょうか」と反論する。確かに、隠喩への理解は特殊な技ではない。隠喩をある程度理解できることとは、言語を理解するために不可欠な才能である。リチャーズが主張しているのは、隠喩が言語に遍在している点である。

しかし、アリストテレスは隠喩が言語に遍在しているか否かという点に関して触れていない。リチャーズが参考にした英訳表現、"the right use of metaphor means an eye for resemblances"は、既出のアリストテレスの和訳において「なぜなら、すぐれた比喩をつくることは、類似を見てとることであるから」と訳されている。（不思議なことに、リチャーズの和訳において、誤りに近いファイフの英訳が和訳されると、リチャーズが省略した「天才のしるし」の箇所が復活している上に、アリストテレスによる原文の本来の意味に接近している。）先に紹介した通り、原文をみると、やはり隠喩は名詞ではなく、動詞として登場する。εὐμεταφορία の語源は、〈複数のものを交互に扱う〉という動作に基いているからこそ、「メタファーをよく理解すること」よりも、「メタファーの構成要素を巧みに組み合わせること」が「天才のしるし」であるとアリストテレスが主張しているといえる。しかし、ファイフの英訳において、"the right use of metaphor"「メタファーの正しい利用」という表現が用いられ、理解または作成のどちらであるのかという点は、アリストテレスの翻訳文においては不明である。リチャーズはアリストテレスの見解を批判しているが、批判の根拠は「メタファーの理解を他人に教えることはありえない」という、アリストテレスが主張していない、英訳のみに存在している論点にある。

リチャーズは意図的にアリストテレスの見解を無視して説明したのか、それとも英訳の不備によって誤解したかという点に関しては、判断の余地はないが、誤訳が発端であっても、リチャーズの見解自体は妥当である。その続きを見てみよう。

言語なるものからして、それがもっている隠喩駆使の力に頼らなければ、全く、われわれの役には立たないのです。（リチャーズ 八三）

リチャーズが指摘しているのは、隠喩が言語に浸透している度合である。言語のすべてが隠喩であるとはいえないが、隠喩なしでは言語が成り立たないという指摘はリチャーズの重要な隠喩論への貢献であると言える。隠喩は一般的な言語の背後に潜んでいるとリチャーズは主張するが、その例として、次のいわゆる「死喩」に関する説明がある。

〝机の脚〟――を例にとってみましょう。（中略）〝馬の脚〟の場合のような、脚という言葉の明瞭な文字通りの用法と、どう違うのでしょうか。（中略）机は脚で歩くことはできません。（中略）机の例では、この根拠は容易に発見できますが、発見できない場合も、きわめて多いのです。（リチャーズ 一〇八）

しかし、リチャーズが指摘しているように、隠喩がこれ程までに言語に浸透しているとすれば、表現における単なる装飾と考えるわけにはいかない。アリストテレスの伝統を受け継いだローマ帝国時代の修辞学者のキケロなどは、隠喩を言葉のあやの一種として論じてきたが、リチャーズはこの修辞学の発想を次の通り批判している。

> "修辞学"の歴史を通じて、隠喩は、ことばに対する一種の巧妙な臨時的工夫、ことばの変通性の附帯的事項を利用する機会、または、時に妥当ではあるが非凡の手腕と注意を要するもの、として取り扱われてきました。（リチャーズ　八三）

隠喩は単なる装飾であると考えられてきたからこそ、隠喩の研究が十分なレベルへと発展しないと、リチャーズは次の通り主張している。

> 《思惑》は隠喩的であって、比較によって進展します。そして、言語の隠喩も思想の隠喩的な性格に由来するのです。隠喩論を改良しようとするならば、この事実を忘れてはなりません。（中略）この技術をもっと、議論しやすい科学の形に翻訳する必要があります。（中略）内含的な認識を外顕的な識別にまで高めなければなりません。（リチャーズ　八七）

右記の見解も、リチャーズの重要な隠喩論への貢献の一つであるといえる。人間にとって、隠喩を理解することは極めて容易である。しかし、その理解はあくまで不正確なものであり、容易に理解できる隠喩を具体的に分析する力は自然には生じない。この〈実践力〉と〈分析力〉の差は、隠喩研究の発展に対する重大な妨害となっている。分析力を高めるには、如何なる手段が好ましいだろうか。リチャーズは隠喩を分析するために、術語が必要であると指摘している。

> もしわれわれがジューニ（12）ということばを、あるときは1、あるときは2、あるときは21の代わりに用い、そして、いろいろの計算でどの意味に用いているかを、記号の助けなしに、何とかして暗記したり見分けたりしなければならないとしたら、もっとも初歩的な算数でも、どのようなものになるでありましょうか。意味、表現、隠喩、比較、主題、詞姿、心象のごときことばは、すべて、かような意味の移転をします。この事実を認識さえすれば、それだけで、すでに隠喩研究のおくれた理由の（中略）一部の説明にはなります。（リチャーズ　九〇）

この術語の空白を埋めるための手段として、リチャーズは「注意」（英語では"tenor"）と「媒体」（"vehicle"）という、二つの用語を提供する。

> まず手始めとして、ふたつの術語を導入しなければなりません。それは、ジョンソン博士が、どの隠喩でも、究極のところ、われわれに与えるふたつの概念と呼んだものを、相互に区別するのに役だちます。わたくしは、これを《注意》と《媒体》と呼ぶことにします。隠喩に関して奇怪なことが多多あるうちでも、奇怪至極なことは、隠喩のこの2面を区別するのに一定の術語がないことです――いやしくも、混乱なしに分析を行なおうとすれば、このような術語は便利この上もないものであり、いな、ほとんど必要不可欠でさえあるにもかかわれず、今までなかったのです。（リチャーズ　八八―八九）

ところで、この箇所において再び翻訳における不可思議な変化が見られる。右記の引用において、下線部の言葉は「概念」になっているが、原文の英語では、"idea"、つまり「観念」が用いられていた。翻訳を通して、リチャーズの曖昧な英語"idea"が言語学の専門家が利用する専門用語"concept"に変化した。この傾向は、翻訳上の進化ともいえよう。レイコフの概念隠喩論は後述するが、リチャーズの隠喩論がレイコフのものにもっとも接近しているのは、日本語訳においてである。

リチャーズは、文芸評論家であったため、彼の専門用語を用いた分析の実例を取り上げよう。イギリスの詩人、Sir John Denham のテムズ川に関する詩が次の通り、紹介されている。

> ああ、汝のごとく、われもまた流るるをえば。
> 汝の流れがわが主題となれるごとく、そをわが模範とするをえば。
> 深けれども滑澄に、静かなれども不活発ならず、
> 強けれどもたけからず、あふるることなく、充ち満てり。（リチャーズ　一一一）

この詩に関して、リチャーズは、やはり注意と媒体を特定しつつ、隠喩の分析を行なう。

> ここでは、詩人の心の流れが主意であり、河は媒体であるといってよいでしょう。（リチャーズ　一一一）

「心の流れ」という表現は原文において、"flow of the poet's mind"（Richards 一一一）と表現されている。リチャーズは自分の術語を一応用いているが、それにも関わらず、その説明は理想的ではないといえる。「川の流れ」という隠喩を説明しているが、「心の流れ」という表現、つまり同じ隠喩の異なる形式を利用している。正確さのために術語を用いているが、やはり、隠喩の明白で具体的な説明は、術語の問題のみには限定されていない。例えばリチャーズが「詩人の心境における変化の有様」という表現を用いたとすれば、先の説明における循環論法的な説明を回避できたはずである。

リチャーズの見解を発展させた哲学者　ブラック

一九六二年に、コーネル大学などの哲学者、マックス・ブラックは、*Models and Metaphors: Studies in Language and Philosophy* という著書を発表した。その専門書全体は未だに和訳されていないが、注目された隠喩に関する第二章のみは佐々木健一編『創造のレトリック』に収録されている。

ブラックは、リチャーズ同様に、隠喩を分析するために、専門用語が必要であると判断した。しかし、ブラックはリチャーズの術語に満足せず、新しい用語を提供している。ブラックの分析方法を紹介する典型的な事例及びそれの分析を見てみよう。

> The chairman plowed through the discussion. (Black 二六)
>
> 議長は議論を鋤き分けていった。（ブラック　三）
>
> 今後、「鋤き分けた」の語を隠喩の焦点（focus）、残余の部分を枠組み（frame）と呼ぶことにしよう。（ブラック　六）

リチャーズとブラックの術語はある程度異なっている。隠喩における、注目を集めがちな項目を表現するため、ブラックの用語「焦点」がリチャーズの用語「注意」に類似しているといえる。しかし、リチャーズの「媒体」と異なって、ブラックのもう一つの用語「枠組み」は、コンテクストを含む形にその範囲を拡大しているとはいえ、隠喩が二項対立関係である点を軽視する傾向が見られる。ブラックの具体的な説明は次の通りである。

> 一般に、我々が比較的単純な隠喩ということを言う時には、或る語句が隠喩的に用いられ、残余の語句が非隠喩的に用いられるような表現を念頭においているものである。（ブラック　五）

確かに、右記の例、「議長は議論を鋤き分けていった」において、一般的な文章において、隠喩的に用いられている語は目立つ。少なくともこの例において、隠喩であるという意識がその違和感から浮上してくる。その上、注目を集める「焦点」という単語の真意は、隠喩の背景全体を理解しなければ、解釈できない。ブラックが指摘しているのは、文章内におけるコンテクストのみならず、文章以外に存在する背景となる知識のことである。

> コンテクストの重要性に関して、ブラックは次の通り付言している。
>
> チャーチルの有名な台詞にムッソリニのことを「that utensil あの道具」と呼んだものがあるが、その時、声の調子、前後の言葉、歴史的背景などから、これが何の隠喩なのかは明らかであった。（中略）隠喩の認知と解釈のために当の発言をめぐる特殊状況に注意を払わなければならない場合があるという一例です。（ブラック　七）

以前に説明した通り、アリストテレスは、隠喩が論理学的な理屈に基いていると考えている。しかし、数学理論者であり、哲学者でもあるブラックは、隠喩が論理的に展開しないことに注目している。彼の説明の要点は次の通りである。

> もし「AとBはPの点に関して似ている」（ブラック　一四）のである「ならば、物理学の命題を支配しているのと同じくらい厳格な規則が、直喩を支配することになるかもしれない。」（ブラック　一四）実際はそうではないからこそ、「隠喩的陳述は形式的比較やその他何らかの本義的陳述の代替物ではなく、他と異なる自身の能力と成果とを持つのである。」（ブラック　一四）

ブラックはアリストテレスの影響をそれほど受けていないと見えるが、リチャーズの隠喩論に登場する一つの発想が、ブラックの理論において、決定的な役割を果たしている。それは二項対立関係における「相互作用」である。ブラックは次の通り、リチャーズを引用している。

> リチャーズからの引用：「この上なく単純に定式すれば、隠喩を用いる時我々は、一語ないし一句を支えとして、二つの異なるものについての思念を同時に働かせている。この語句の意味は二つの思念の相互作用の結果として生じたものである。」（ブラック　一五）

ブラックは、リチャーズと同様、隠喩の解釈においてコンテクストを重視している。しかし、この点において、ブラックの見解はリチャーズと比べて、より発展したものと見える。なぜなら、ブラックは隠喩を理解する人間の既存の知識、すなわち二項対立関係の項目以外の要素を、隠喩のコンテクストとして配慮しているからである。この「既存の知識」を、「連想された通念の体系」と、ブラックは呼ぶ。

> 「Man is a wolf. 人間は狼である」という陳述をとりあげてみる。これには二つの主題があると言ってよい。第一主題の人間と副主題の狼とである。さてこの隠喩的な文は、狼をろくに知らない読者に対しては意図された意味を伝えることができないだろう。必要なことは、「狼」の標準的な、辞書に書かれているような意味を知ることではなく――言い換えればその語を本義で使えるということではなく――連想された通念の体系（system of associated commonplaces）と私が呼ぶものを知っていることである。（ブラック　一七）

この側面において、隠喩を論理に基づいた現象として理解するアリストテレスの見解から隔れてしまう。ブラックにとっては、この「連想された通念の体系」は論理学的な法則によって形成されている構想ではなく、誤解さえ含まれている類の知識体系である。隠喩の土台となる、この非論理的な組織性が次の通り説明されている。

> 専門家から見れば、通念の体系は半可な真実や、多くの誤謬を含んでいるかもしれない（たとえば鯨を魚とするような）。しかし隠喩が効果をあげるのに大切なことは、その通念が真実であることではなく、それがすみやかに、かつ自然に想起されることである。（ブラック　一七）

ブラックによると、二つの連想された通念の体系を合わせると、「焦点」が「枠組み」によって変化させられるのみならず、「枠組み」の意味内容も、ある程度、変化させられる。この点に関して、ブラックは次の通り述べている。

> もしある男を狼と呼ぶことが彼に特別な照明をあてることであるとすれば、この隠喩によって狼もまた他の場合に比べて人間的に見えてくるのだということを、我々は忘れるべきではない。（ブラック　二二）

ブラックは哲学者であるため、主に哲学的な言語を駆使して隠喩論を展開したが、部分的に文学に関する隠喩に関しても意見を述べている。テクストとは、技巧として用いられている隠喩の大枠、すなわち広範的なコンテクストとして理解されている。文学における隠喩の技巧に関してブラックは次の通り述べている。

> 隠喩は承認済みの通念だけではなく、特に構築された含意体系によって支えられることもある。つまり、隠喩はオーダーメイドのものもあって、必ずしもできあいを買うことはないのである。（ブラック　二二）

言語学の枠を超えて、記号論的な隠喩論を提供した哲学者リクール

一九七五年にフランスの哲学者、ポール・リクールが「生きた隠喩」という著書を発表した。ブラックとリチャーズの見解を参考にしつつ論じたリクールであるが、とりわけヨーロッパ大陸の様々な思想を活用しつつ隠喩を再検討して、記号論の知識に基づいた隠喩論を発表した。

リクールによると、従来のアリストテレスの影響は決定的であったが、同時に不完全な理解へと導いた原因でもあった。隠喩論の誤った初歩に関して、リクールは次の通り述べている。

> 「詩学」では、隠喩はどのようにして借辞に結びつけられるか。借辞の中軸をなす名詞の媒介によってである。「借辞全体は次の部分に帰する。すなわち字母、音節、接続小詞、分節小詞、名詞、動詞、格、文章である」（「詩学」1456b 20-21）。こうしてその後何世紀にもわたって、隠喩の運命が固定される。以後、隠喩は詩学と修辞学とに、言述のレベルでなく、言述の分節、すなわち名詞のレベルにおいて、関係づけられることになる。（リクール　一一）

先の発言から明らかであるように、リクールは言語学及び言語学が提供する意味論に対して否定的であるといえる。リクールは、彼の見解を説明している際、フランスの言語学者バンヴェニストの *Problèmes de linguistique générale* から引用を行なっているが、次の通りである。

文は語において実現されるが、語は単に文を分節したものではない。文は、諸部分の総和には還元されない一つの全体をなしている。この全体に内在する意味は、構成要素の集合内に配分されている。（リクール　一五二）

つまり、テクストの本当の意味がディスクール全体に存在している。この見解が正しければ、文書の構成要素である言語は、その全体的な意味を開放するための手段に過ぎない。リクールの思想は、不完全である言述レベルの思想ではなく、相対性に富んでいるディスクールの思想であるといえる。アリストテレスは言述レベルでしか考えていないため、リクールはアリストテレスの隠喩論を批判することとなる。一方、リクールはリチャーズ及びブラックがコンテクストが重要であると主張している部分のみを肯定している。

しかし、一つの点において、リクールはリチャーズとブラックの意見と正反対の立場を取っている。それは、分析の必要性という点である。リクールにとっては、文学作品はニュアンスや示唆に富んでいるがゆえに、それらを検討すべきは言述レベルではなく、ディスクール・レベルなのである。

認知意味論の知識によって説明する言語学者レイコフ

アメリカにおいて認知言語学の代表的学者の一人は、カリフォルニア州立大学バークレー校で現在言語学を教えているジョージ・レイコフである。レイコフは元々意味論を研究していたが、オレゴン大学の哲学者マーク・ジョンソン、そして文学研究者、マーク・ターナーとの共作により、隠喩に関する二冊の専門書を出版した。哲学における隠喩を説明する『レトリックと人生』は一九八〇年に発表され、文学作品における隠喩を取り上げた書物は、一九八七年に発表の『詩と認知』であった。

レイコフにおける隠喩は、言述レベルよりもむしろ、概念体系に帰属している。レイコフは意味論の専門家であるため、隠喩に関する基本的知識は、言語と概念の関係性を研究することによって得た結果であった。言語学者のマイケル・レディーの研究の影響も受け、哲学者ジョンソンと共著の『人生とレトリック』という著書を発表した。レイコフとジョンソンによると、隠喩の最も基本的な要素は、言語ではなく、概念である。この点に関して、次のように彼らは説明している。

人間の概念体系の中にメタファーが存在しているからこそ、言語表現としてメタファーが可能なのである。したがって本書は、たとえば「議論は戦争である」のようなさまざまなメタファーについて言及する場合、常に、メタファーとはメタファーによって成り立っている概念のことを意味しているのだと御承知いただきたい。（レイコフ、ジョンソン　七）

人間は、生れてすぐ、日常的な行動に不可欠な概念体系を築きはじめる。言語を習う以前の時点においても、すでに基本的な概念は心理のなかに書き込まれているのである。大人の概念体系と比較すれば、子供時分の概念は素朴なものであるといえるが、子供は言語を習う際に、新しく記憶する言葉をその概念体系の土に植えつけていく。言語的な知識は、既存の概念体系との関連を通して、全体の理解が安定してくる。つまり、言語及び隠喩は、独立した形で機能しているのではなく、既存の概念体系に根本的に依存している。

レイコフは文学研究者のマーク・ターナーと、『詩と認知』という著書を共作した。『詩と認知』はとりわけ文学作品における隠喩を紹介しているので、今後は、『レトリックと人生』の引用をを交えつつ説明する。レイコフとターナーは、文学における意味と概念の関係に関して、次の通り述べている。

これと関連した混乱は文学研究にもみられる。それは、詩やその他の文学作品の意味は言葉自体に内在するという見方である。音声の連続としての言葉は、ある概念図式の中の概念を慣習的に表現する。（中略）例えば「刈りとる者」という言葉は植物を栽培する作業全体を図式的に喚起する。つまり言葉はそれが狭い意味で指示するよりも多くのものを心の中によび出すわけである。意味のありか［た］・とは言葉（すなわち口にされた音声の連続やページにある文字の羅列）ではなく、それによって喚起される概念内容なのである。隠喩はその意味で人の心の中にあるわけで、ページの上の言葉に存在するのではない。（レイコフ、ターナー　一二〇）　［］・の箇所は筆者が加筆したもの。

ここで注目したいのは、概念と隠喩の関係である。レイコフとターナーによると、「刈りとる者」と言う表現は、直接的に言語以外の心理（つまり、感覚）の面と繋がっている。この見解はブラックが紹介した「連想された通念の体系（system of associated commonplaces）」（ブラック　一七）の発想と非常に似ている。実際、ブラックの「連想された通念の体系」に「感覚」的な側面を加えると、レイコフが提供している「概念」になると

いえる。

レイコフは、リチャーズとブラックと同様、隠喩を分析するための術語の必要性を感じたが、自分の隠喩論が前者よりも進んでいると考えたためか、以前の用語を採用しなかった。レイコフの用語は、二項対立関係の二つの概念を重視する表現を用いている。その上に、レイコフは、頭脳内に見られる現象を表現する「写像」（"mapping"）という神経学の専門用語を利用している。写像は、人間の頭脳における、概念と概念の間に見られる電気化学的な経路である。レイコフは次の通り説明して、事例をあげている。

これに対し、深く慣習化された概念的隠喩、すなわち本書で論じる基本的隠喩にあっては、ある概念（＝目標領域）のもつさまざまな側面が他の概念（＝根源領域）の非隠喩的な側面を通じて理解される。

AはBであるという隠喩はすなわち根源領域Bについての知識構造の一部が目標領域Aへと写像されることに他ならない。（レイコフ、ターナー　七一）

例：時は私の若さを盗んだ。（レイコフ、ターナー　四八）

擬人化は隠喩の一種である。したがってそこには根源領域（盗み）があり、目標領域（時）がある。われわれは根源領域の何らかの側面を隠喩によって目標領域に写像し、それについて新しい理解を得るわけであるが、今の例では、こうした写像関係によって、若さを貴重品として隠喩的に理解することが規定されている。（レイコフ、ターナー　四九）

レイコフの場合において、彼が提供している用語は、リチャーズと同様に二項対立関係を前提としている。その上、隠喩を解釈するために、ブラックは「連想された通念の体系」のようなコンテクストを理解する必要があるとされているが、レイコフはブラックのように一方のみを考察しているのではなく、根源領域のコンテクストも、目標領域のコンテクストも視野に入れている。ある意味で、レイコフは、リチャーズの用語とブラックの用語の良い特徴を自分の用語に生かして融合したといえる。

アリストテレスの時代から、比喩と隠喩は別々の現象と見られてきたが、レイコフにとっては、この相違は表面的な形式のみに関することであり、隠喩の機能性に大きくは影響を与えないものである。

Aが文字通りにはBでないという時、隠喩は「AはBである」という形の表現であり、「AはBのようである」という形の表明である。

こうした、隠喩を文法形式によって規定しようとする試みは、隠喩の何たるかを全く見失っている。正しくは、隠喩とは一つの概念を他の概念によって理解することであり、表明の形式が隠喩的であろうと直喩的であろうと、概念的には隠喩が用いられているのである。（レイコフ、ターナー　一四三）

死喩に関して、レイコフは、リチャーズ同様、「机の脚」のような、死喩に見えるものは、実際のところ、まだ概念との関連性を持っているからこそ、完全に「死んでいる」と判断することができないとしている。ただし、レイコフは、場合によっては、本当の意味の死喩の存在を認めている。例として、彼は英語の言葉 "pedigree" を指摘している。

例えば、pedigree（家系）という語は古代フランス語の pied de grue（鶴の脚）から来ている。これはもともと二本に分かれた鶴の脚の形を家系の枝分かれ図へと写像したイメージ的隠喩に基いている。だがこのイメージ的隠喩は現在は概念レベルには存在しないし、言語レベルでも pedigree で鶴の脚を指したりはしない。これは概念・言語の双方のレベルにおいて、死んだ隠喩といえる。（レイコフ、ターナー　一三九―一四〇）

レイコフの隠喩論は概念を重視しているが、その概念は普遍的なものだろうか。概念が普遍的なものであるとすれば、ある文化言語体系に見られる隠喩は異文化においても存在しているはずである。レイコフによると、概念は部分的に人間個体の身体上の基本的な組織性に属しているが、残余の部分は文化あるいは個人的な体験によるものであるとしている。それゆえ、多数の隠喩には、文化的な特色が見られる。文化レベルにおける隠喩の一貫性に関して、レイコフは次の通り述べている。

ある文化における最も根本的な価値観は、その文化で最も根本的な概念に構造を与えているメタファーと一貫性をもっている。（レイコフ、ターナー　三二）

二冊の著書において、レイコフは多数の事例を分析していく。その例文のなかに、普段気づかないような、日常的に使用されている言語に潜んでいる隠喩も多数見られる。その具体例としては、次のようなものがある。

IDEAS ARE PLANTS

〈考えは植物である〉

His ideas have finally come to *fruition*.
〈彼の考えはついに実を結んだ。〉
That idea *died on the vine*.
〈その考えは実を結ばずに終わった（＝未完に終った）。〉
That's a *budding* theory.
〈芽を出しかけたばかりの理論だ。〉
It will take years for that idea *to come to full flower*.
〈その思想が開花するには何年もかかるだろう。〉
（レイコフ、ジョンソン　七三）

右記の例から分る通り、文のみを独立した形で解釈する際には、隠喩体系の一例であることに気づくことはないだろうが、レイコフが同類の表現を右のように並列すると、その体系性を見出すことが容易にできる。〈考えは植物である〉という隠喩は、冒語的な飾りではなく、思想上における構造の一つといえる。例文全部が和訳のまま自然に用いられることはないが、その大半は問題なく意味するところを伝えられるため、日本語にも、英語と類似した隠喩体系が存在していると仮定しよう。

リチャーズが指摘した通り、隠喩が言語に遍在しているとすれば、なぜその点がより多く一般的に認知されないのだろうか。その上、レイコフによると多くの隠喩は、単発的な隠喩として発生するよりも、連結している隠喩体系の一要素として利用されることの方が多い。この見解が妥当であるとすれば、なぜその隠喩体系の存在がより注目されなかったのだろうか。レイコフは、この点に関して、次の二つの理由を明示している。

一つは、「単発的方法」とでも呼ぶべきものであり、個々の隠喩的表現を結びつける体系的な原理があることに目を向けず、単発的に分析する取り組み方である。その結果、個々の隠喩表現は互いに無関係であるかの如く分析することになるわけである。

もう一つは、「根源領域しか見ない」誤りで、根源領域から目標領域への写像を見落とし、前者だけを考えに入れる立場である。例えば「古い炎（＝昔の恋人）」（old flame）と「燃える青春」（fiery youth）という例では、どちらも根源領域が火であることから、両者を「火の隠喩」としてひとまとめにしてしまい、同じはたらき方をしていると考えてしまうのである。だが実際には、「古い炎」は愛は火であるという隠喩に、「燃える青春」は生命は火であるという隠喩に基いている訳で、根源領域は同じでも目標領域と写像関係が異なっているのである。（レイコフ、ターナー　一三八―一三九）

隠喩論に対する、レイコフのもう一つの重要な貢献は、隠喩の典型的パターンを指摘したことである。隠喩のすべてに見られる傾向ではないが、多くの場合に、隠喩の「根源領域」はより具体的な領域であり、「目標領域」はより抽象的な領域であるといえる。例として、ブラックの事例をもう一度、取り上げよう。

The chairman plowed through the discussion.（Black　二六）
議長は議論を鋤き分けていった。（ブラック　三）

レイコフの分析法を用いて、ブラックの事例を分析すると、〈議長の議論に対する態度〉が「目標領域」になっているが、「議論の進め方」は比較的抽象的な行為であるといえる。これと比べて、〈土を耕す農家の土に対する態度〉はより具体的な行為である。表現上、短い隠喩であるが、具体性に富んでいる〈農家の土に対する態度〉を通して表現されているため、

「議長は会議に出席している人たちの意見に関心を示さないままに、会議を速やかに進行して行なった」という、より豊かなイメージを生み出しているといえる。この例と同様に、抽象的概念を、より具体的な概念を通して理解するのは、隠喩の基本的な戦略である。例外はもちろん存在するが、レイコフがこの傾向を指摘していることは、隠喩論への多大な貢献であると考えられる。

ここで、ブラックの「相互作用説」に戻るが、この相互作用説はレイコフの見解とは異なっていることを確認したい。レイコフは、おそらくブラックの説を考慮した上で、次の通り反論している。

われわれが人生を旅という形で理解するさいには、人生を旅という概念の枠内で構造化し、人生という概念領域に旅と結びついた推論のパタンを写像する。その一方で旅という概念領域には人生と結びついた推論のパタンは写像されない。（中略）人生は旅であるという時には二つの領域を双方向的に比較して、そこから共通を拾い上げているだけだという見方がとられる。（中略）もしそうだとすれば旅を習慣的に人生についての言葉で語ることもできようし、搭乗を「誕生」と呼び、出発を「死」と呼んだりすることもできるはずである。（レイコフ、ターナー　一四二）

レイコフにとって、隠喩による概念と概念の関わりは、一方通行の関係である。ブラックは、「人間は狼である」という隠喩が成り立つと、狼はこの隠喩を通して人間に関連し

てくるというが、レイコフとターナーは、このような関連性を否定している。

ディヴィドソンの「非隠喩論」に関して

隠喩研究の歴史において、「隠喩」の基本的な存在を疑問視する学者もいることを否定できない。とりわけブラックの隠喩論に対して反発し、隠喩の懐疑者の代表になったのは、米哲学者のディヴィドソンである。ディヴィドソンは次の通り述べている。

われわれは隠喩によってあるものを別のものとして見るようになるのだが、それは、そのような洞察を呼び起こしたり誘発したりするような、ある字義通りの陳述を行なうことによって偽されるのである。（ディヴィドソン　二九一）

つまり、ディヴィドソンが隠喩に関して否定しているのは、隠喩の存在そのものというよりも、隠喩という現象の認知上の過程である。普段の言語はストレートな意味をそのまま解釈するが、隠喩はこのようなストレートな解釈が失敗することによって、聞き手は想像力を働かせて何かの共通性を手探りしなければならない。

具体的にディヴィドソンの論点を検討してみよう。彼は事物の共通性に関して、次の通り述べている。

似性あるいは類似性（similarity）を考えてみよう。例えば、二つの薔薇は、それらが薔薇であるという性質を共有しているがゆえに類似している。二人の幼児は、その幼児性のために類似している。あるいは、もっと端的に、薔薇は薔薇であるがゆえに、幼児は幼児であるがゆえに類似している。（ディヴィドソン　二六六）

しかし、隠喩には一般の言語に見られる類似性がないために、この字義通りの発言は隠喩作業を引き起こす。

ある有名な批評家の語ったところによると、トルストイは「偉大な徳高き幼児」であるという。ここで言及されているトルストイは、明らかに、幼児のトルストイではなく、大人の作家トルストイである。だから、これは隠喩である。では、作家としてのトルストイはどういういみで幼児と類似しているのであろうか。おそらく、われわれのすべきことは、通常の幼児すべてと、それに加えて大人のトルストイをも含む、対象のクラスを考え、そうして、このクラスの成員はどのような特殊で意外な性質を共通に持っているのかと自問することであろう。（ディヴィドソン　二六六―二六七）

しかし、その隠喩に慣れた後は、字義通りの意味として捉えることができる。このため、元々隠喩的な作業を引き起こした字義通りの表現から、本来の字通りの意味とは異なる、新しい字義通りの意味が生れ出されることになる。

生きた隠喩（living metaphor）の持つ比喩的意味は、死んだ隠喩の字義通りの意味のなかで不滅となるはずである。（ディヴィドソン　二七四）

ディヴィドソンの見解がブラックらのものと異なる点は、おそらく隠喩の解釈における曖昧性に関する解釈である。ブラックが提供する隠喩論において、隠喩は場合によっては正確な解釈ができないが、ある程度安定した解釈に導くこともある。その上、隠喩を起点にすれば、限定された解釈の拡張も可能である。ブラックにとっての隠喩は、正確な解釈には導かないが、それにもかかわらず非常に豊富なコミュニケーション手段であると位置付けられている。一方、ディヴィドソンは、ブラックの見解とは正反対に、隠喩という類似性を把握するための手探り作業が曖昧であると認めているが、慣習化された隠喩的な表現であるなら、慣習化された時点でその曖昧さがすでに排除されているため、「手探り」の必要のない字義通りの表現になっている。つまり、慣習化された「隠喩」は、隠喩としての存在ではすでになくなっている。そのような表現は隠喩に見えたとしても、字義通りの意味への変化はすでに成し遂げられていると主張している。つまり、本当の隠喩は例外的な、曖昧な言葉の実験であり、その実験が成功すれば、もはや曖昧さを含まない平凡の言語が誕生するわけである。

従って、ディヴィドソンは、隠喩であるか否かの、判断が困難な隠喩は存在しないと主張している。この点に関して、彼は次の通り述べている。

というのも、言葉の多義性というのは、もしあるとしたらだが、その言葉が通常の文脈ではあることを意味し、隠喩的な文脈ではなにか他のことを意味している、という事実によるからである。だが、隠喩的な文脈においては、その意味について必ずしもためらうとは限らないのである。ためらう場合というのは、いくつかの隠喩解釈のうちでどれを受け入れるかを決定する場合であるのが普通である。現在目にしているものが隠喩であるかどうか迷うことは、めったにないのである。（ディヴィドソン　二六

八）

しかし、とりわけ詩において、隠喩であるか否か、判断がつかない例は多く見出すことができる。ディヴィドソンはそのような反論を予期した上で、T.S. Eliot の詩 "The Hippopotamus" を例として取り上げ、さらに次の通り、説明を加える。

もちろん、この詩は、その言葉の字義通りの意味を超えて多くのことをほのめかしている。しかし、ほのめかしは、意味ではない。（ディヴィドソン　二八〇）

結局、ディヴィドソンの隠喩論は、日常の言語コミュニケーションが正確に行われているという前提に依存している。言語コミュニケーションが正確なものであれば、曖昧な隠喩は臨時的手段ということになる。隠喩の正確さが十分な水準に達すれば、本格的な字義通りのコミュニケーションが誕生すると考えられている。

しかし、言語コミュニケーションはディヴィドソンが主張しているほど正確なものだろうか。「ほのめかし」レベルの隠喩性を認めないディヴィドソンの見解は、少なくとも暗示を大切にする文学の世界では無役なものであるといえる。日本の隠喩研究家の菅野はディヴィドソンの見解に対して次の通り述べている。

ディヴィドソンが「意味」というとき考えているとおぼしい、事態を記述する平叙文の意味は、意味のパラダイムであるところか、われわれが普通に解している意味とはほとんど呼べない代物であって、それは論理学者の言う、文の論理形式とか真理条件に代替しうるものなのである。（菅野　四九）

逆にいえば、ブラックと同様に言語学者レイコフの見解は、概念、言葉、コミュニケーション及び隠喩の曖昧性を認める姿勢をとるがゆえに、受け入れやすいといえる。

隠喩論と隠喩の分析に関して

右に検討してきた内容全体を振り返った際に、ディヴィドソンの否定的な見解を除いて、共通の側面を見出せるだろうか。その共通の側面は、主に三つあると考えられる。第一に、隠喩は一語が生み出す現象ではなく、何らかの形の二項対立関係を表わしている。第二は、（アリストテレスはこの点において、例外的と言えるが）隠喩は単なる文芸における装飾ではなく、遍在している思想的要素である。第三の点として、リクールは疑問視するが、専門用語を駆使すれば、より詳しい隠喩の分析ができるはずであるという点がある。

そして、共通の理念があるとはいえ、根本的に異なる側面もある。詳細に見ると、多数ある中で、最も重要な論点は、隠喩の基本的性質に関する問題である。議論されている点はもう二つあると言えよう。一つ目は、隠喩を解釈するためには、如何なるレベル（言述レベル、ディスクール・レベル、概念レベル）において分析すれば良いのかというもの。二つ目は、専門用語を利用する際には、どの術語が良いのかという点。

筆者としては、言語学に関連する専門的知識に基いているからこそ、文学における隠喩を分析する際には、レイコフが提供する用語が優れていると結論付ける。その上、レイコフの隠喩論は、隠喩における体系性を論じていることから、日本文学及び日本文化における隠喩を分析すれば、日本独特の体系性を把握することも可能かもしれない。しかし、リクールがリチャーズとブラックに対して指摘したのと同様に、レイコフの見解は、ディスクールにおける隠喩を理解できるほどには、コンテクストを充分に配慮していない。隠喩論としては優れているため、レイコフの概念隠喩論を利用することが望ましいと考えられるが、作品全体のコンテクストを理解するために、他の方法と併用した方が好ましいと考えられる。

参考文献

アリストテレス（岡道男訳）「詩学」『アリストテレス　詩学・ホラーティウス　詩論』岩波書店、平成九年

アリストテレス（戸塚七郎訳）「弁論術」『アリストテレス　弁論術』岩波書店、平成四年

アリストテレス（山本光雄訳）「弁論術」『アリストテレス全集、第一六巻：弁論術・アレクサンドロスに贈る弁論術』岩波書店、昭和四三年

R. ウェレック、A. ウォーレン（太田三郎訳）『文学の理論』筑摩書房、昭和四二年（原著：Wellek, Rene & Austin Warren. *Theory of Literature*, 3rd Ed. New York: Harvest, 1956.）

菅野盾樹『メタファーの記号論』勁草書房、昭和六〇年

D. ディヴィドソン（野本和幸、植木哲也、金子洋之、高橋要訳）『真理と解釈』勁草書房、平成三年（原著：*Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford: Oxford UP,

1984.）

広島大学総合科学部・哲学学校編『万葉植物物語』中国新聞社，平成14年

M. ブラック（足ヶ崎孝訳）「隠喩」佐々木健一編『現代のレトリック』勁草書房，昭和62年（原著：Black, Max. *Models and Metaphors: Studies in Language and Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell UP, 1962.）

P. リクール（久米博訳）『生きた隠喩』岩波書店，平成14年（原著：Ricoeur, Paul. *La mētaphore vive*. Paris: Éditions du Seuil, 1975.）

I. A. リチャーズ（石橋幸太郎訳）『新修辞学原論』桜楓社，昭和51年（原著：I. A. Richards. *The Philosophy of Rhetoric*. NY: Oxford University Press, 1936.）

G. レイコフ，M. ジョンソン（渡部昇一，楠瀬淳三，下谷和幸訳）『レトリックと人生』大修館，昭和55年（原著：Lakoff, G. & M. Johnson. *Metaphors We Live By*. Chicago: U of Chicago P, 1980.）

G. レイコフ，M. ターナー（大堀壽夫他訳）『詩と認知』紀伊國屋書店，平成11年（原著：Lakoff, George & Mark Turner. *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: U of Chicago P, 1989.）

Benveniste, Emile. *Problemes de linguistique gênêrale*. Paris: Gallimard, 1966.

Chase, Alston H. & Henry Phillips, Jr. *A New Introduction to Greek*, 3rd Ed. Cambridge, MA: Harvard UP, 1961.

Euripides. "Phoenician Maidens." In *Euripides*, Vol. 3. Arthur S. Way, ed. Cambridge, MA: Heinemann, 1962.

Aristotle. *Poetics*. (Tr. W. Hamilton Fyfe) In "Aristotle: The Poetics," Longinus "on the Sublime, Demetrius on Style." Cambridge, MA: Harvard UP, 1932.

Liddell, Henry G. & Robert Scott. *A Greek-English Lexicon, 9th ed*. Oxford: Oxford UP, 1968.

九州大学大学院 比較社会文化学府
『比較社会文化研究』第24号（2008年9月）

What is metaphor ?

Daniel STRACK

Because metaphor is commonly found in literature, attempts to interpret literary works should always keep the possibility of metaphorical contribution clearly in mind. Unfortunately, from a theoretical viewpoint, the precise nature of metaphor has been hotly contested. This paper will mention various scholars that have contributed to the theoretical understanding of metaphor and examine their ideas in an attempt to derive a sound theoretical framework for examining metaphor in literary contexts.

Aristotle explains metaphor as a comparative activity. The similar aspects perceived in the two different elements are seen as the logical result of comparing two elements in the same overarching category. Richards critiques Aristotle's viewpoint and notes how a great deal of everyday language is, in fact, derived from previous metaphorical expression. Black expresses agreement with Richards's viewpoint and stresses the bidirectional nature of the relationship between the two elements. Lakoff points out how metaphor derives its rhetorical power from already existing concepts in the mind and emphasizes that metaphor is not a purely linguistic activity but a broadly conceptual one.

Ricoeur understands metaphor as a straightforward activity on the linguistic expression-plane that nevertheless must rely on the broader semiotic network for its power and subtlety. Davidson, on the other hand, explains that many expressions which appear be metaphorical have in fact become "literal" through use. In this sense, Davidson sees metaphor as the momentary creative inspiration that gives birth to newly minted literal expressions. While the opinions of the scholars mentioned differ greatly in terms of particulars, with the exception of Davidson, most recent scholarship views metaphor as a pervasive linguistic strategy used to encourage the understanding of unlike domains of experience in terms of some mutual aspect or aspects.